

「田舎町スーロン」の変革

デンマークのユトランド半島は能登半島にかたち
が似ている。コペンハーゲンのあるシェラン島から
アンデルセンの故郷のフエン島を抜けて、ドイツ国
境につづくこの半島に渡ると、広がる青い空ととも
に土の匂いを感じる。

思えば、コペンハーゲンもその前の訪問先・ノル
ウェーのベルゲンも岩盤の町だった。スウェーデン
生まれのノーベルが土地開発のためにダイナマイト
を発明したのも、その土地が巨大な岩盤だったから
だろう。

でも、ユトランドには土の匂いがする。きっと、
この半島に生きた人たちは原野を開き、耕し、土を
つくり、そこに種をまき、生き物を育てたのだろう。
自分の中にある農民のルーツがそれを感じさせる。
わたしが北欧の中でもっともデンマークに共感する



のは、そうした土の文化が感じられるからなのかもしれ
ない。



スカネボーは人口3万ほどの静かな小さな町だ。
湖というか沼というか、氷河の跡なのかもしれない
けれど水と緑にあふれ、町全体が美しい絵の中にあ
る自然公園のようだ。

「田舎町スーロン」は、1935 年、重度の知的障
害者の大規模施設として、この田舎町の農場の白い
建物ではじまった。当時は 550 人が 6 人部屋で、100
人のスタッフと自給自足で暮らしそう。70 年代
に改築され、80 年代からは 2 部屋をつぶして 1 室
に改築し、共同スペースを設けた。

社会大臣のバンクーミケルセンが提唱したノーマ
ライゼーションの中で、大規模施設は解体され、国
内に 5 か所あった大規模な知的障害者の施設は、ス
ーロン以外はすべて廃止された。

しかし、1990 年に施設長になったモウリッツ・
アイエンダールは、利用者の親たちの強い要請によ
って（町から近いのに自然が豊富でオープンに暮ら
せる！）、施設解体を先延ばしして、障害のある住
民たちの幸せのために何が必要か考えた。

2001 年、スーロンをはじめて訪問したとき、熊
のような風貌だったモウリッツ施設長は、「ここは
最後の恐竜ディノザウルスさ。でも、けっして消え
てしまうことはない」と言っていた。



2007 年、国をあげての自治体改革により、スー
ロンは県営からスカネボー自治体の運営になった。
しかし、住民の家賃、介護費用、食費はすべて生ま
れた自治体が負担するというシステムのため、小さ
な町は経営体（町予算の 3 %、雇用も大きい）とし
てスーロンを評価し、廃止方針は撤回され、存続に





変わった。

古い住宅からバリアフリーのグループホーム型の住宅がつぎつぎ建設され、スヌーズレン・センターや国の研究・研修機関としての予算も獲得された。

現在の入居者数は 235 人。うち 200 人は他の 34 の自治体生まれだ。スタッフは 750 人。うち 450 人は 2 年半の教育を受けたヘルパーと看護師。医師、看護師、作業療法士、理学療法士などを含む 40 人の医療チームもある。



副施設長のベテランのトリネが案内してくれた。彼女は、2 年前にも訪問したわたしの顔を憶えていてくれた。

・住民は、グループにわかれて日中活動にとりくんだり、各々個人で活動してる

・STU（青年の特別教育システム）で 12 人が学ぶ教育の場がある

・水泳、温水プール、乗馬や音楽療法もとりくんでいる。6 頭の馬がいて、動物の世話も仕事の一つ。など紹介してくれながら、実践哲学ともいえる「ジェントル・ティーチング」について語った。

<http://www.gentlelearning.com/>

・安心なわくの中で生活できて、いろんな人とかわりながら、けして一人ではなく、愛されていること、愛することに焦点をあてる

・安心感は自尊心の向上につながる

・支援者は、相手のことを受けとめ、自分はどうするか？ なにができるか？ をつねに考えることが大切だ

この夏、滋賀で開催された全国障害者問題研究会の全国大会での高谷清さんの記念講演を思い出した。



がら聞いていた。

重症児者が生活するびわこ学園医師として長く働いてきた高谷さんは、「協力・分配・共感」が人類を形成してきたとして、①「協力」、つまり「協力をして物事をおこなう」、②「分配」、つまり「わかちあう」、③そして共感「こころがかよう」ということは、人間にとって、存在そのものであるような状態、こころのうれしさ、よろこび、生きているよろこびがあるのではないかと。自然界で、弱い生き物であった人間が、今日まで生きながらえ、発展してきた根幹のところに、この「協力・分配・共感」があるのではないのでしょうか。

「スーロンが施設解体する情勢のなかで生き残った最大の理由はなにか？」と質問すると、トリネは、

○専門的なケアの継続性を保つためには、ある程度の規模が必要だ

○そのため最近では 100 人ほどの施設がつくられはじめている

○街で暮らせる人たちはそこで生活できる。スーロンの住人は、街では暮らせない。ここなら安心して暮らせる。

○ 25 年ここで働いているが、その頃は「スーロンには入れたくない」と言う家族もいたけど、今は、安心の環境のなかで、一人の人間として尊厳を持って生きていけるとわかって、今は入居希望がたくさんある。

東京ドーム 5 個分といわれる 25 ヘクタールの広大な敷地に点在するグループホーム棟の見学にむかった。

（藪部英夫）



▲乗馬療法中



日本製の「ジョーバー」(中)

▲トランポリンもある